図書館を斜めに見る

守　川　正　道

大学に入って6年になる。入学していらい図書館に入ったのはごく数える程の回数でしかない。あの巨大な暗い建物，それは，恐ろしく人を圧迫する。京都帝国大学図書館の歴史がのしかかってくるようで，耐えられないのである。本は好きなのでよく読む方だと自負しているのだが，図書館になじめないのは何故だろう。官僚的と思い込んでいるからそう見える制服を着た係りの人が，こわいのだろうか。だが実際，親切な人がほとんどなのだからこれは図書館の敷居が高いという原因ではなさそうだ。カードをめくって図書借り出しを依頼するということのめんどくささであろうか。かなり根拠はあるが，これもいたしかたない手続の一つであろう。では，あの大きな部屋の中で，(全くこの天井の高さといったらずいぶん無駄な建物だと思うが，同時に妙な圧迫感もあるから不思議だ) 大きな机を前にして，女性でも前に座ってはくれないかと半分期待しつつ，実際は，自分と同じようなオノコが座って，幻滅する，ということであろうか。だがこういう気分のときは，もはやすでに勉強をしようという段階ではあるまい。本当に読むことに専心しているときは，まわりはそう気にはならないはずだから，あれこれ考えてみて次のようなことに思い至った。元来図書館の用法，といっても，現代に生きる者の使用するがわからいった用法だが，これには二つあると思う。一つは，図書館の蔵書を借りて読むということ。ただしこれはあくまでも，借りるという点に力点がおかれる，なぜなら借りた以上，研究室で読もうが自宅で読もうが文句をいわれる筋はないから。もう一つは図書館とい場所を利用して本を読むということである。もっとも図書館で待ちあわせをすることもあるが，ここではやはり，図書館の机を使って読書するということにしたい。この後者の利用者が現在の我々のまわりでは圧倒的に多いといえるのではなかろうか。試験期になると百貨店の特売場みたいになるのはその典型である。かくて現代は図書館の利用者は，図書の利用ではなく，館＝場所の利用者が圧倒的といえると思う。

かく考えたとき，おのれの図書館を敬遠する原因がわかった。

前者の用法つまり図書の利用という点に関しては，本というものは題名だけでは内容がほとんどつかめないということからくる。我々はまだまだナマの資料（だれそれの日記とか公文書など）を使うには力よわく，いわゆる解説書の類になる。その内容がわからず借りて読んでみるというノンキさ（というよりもこれぐらいにならねばならぬのかもしれぬが）を持ちあわせていないのである。かくて open 式の学科閲覧室やA.C.C.へ，そして古本屋へと足がむく。後者の用法，場所の用法は，あまりに人の出入りがひんぱんであることから落ちつけない，同時に賢こそうな顔付きにあてられて退場ということになってしまう。

かくて今でも汚い下宿で本をめくるのである。

（文学部西洋史学科）